〈解題〉

ここに訳を試みた、王鈺婷著「台湾一九五〇年代におけるモダン女性作家の露出戦略と文化的意味（原題：台灣一九五〇年代摩登女作家的現身策略與文化意涵）」は、国立台湾文学館（台南市）が刊行する『台湾文学研究学報』第十二期（163－186頁、2011年４月）に「『モダンガール』のパフォーマンス空間：『海燕集』（1953）における女性作家の露出戦略と新女性の形成」（原題：「摩登女郎」的展演空間：談『海燕集』（1953）中女作家現身與新女性塑造）」と題して収録された論文である。なお、今回の掲載にあたり、著者により内容も一部修正されている。

著者の王鈺婷は、台湾の国立清華大学台湾文学研究所助理教授を務める若手台湾文学研究者である。彼女は主に、一九五〇年代台湾の文学場における「忘れられた」女性作家による創作について、その作品の意義を掘り起こし、戦後の女性文学エクリチュールの伝統を再評価しようと試みている。その分野におけるこれまでの先行研究を挙げてみると、台湾文学史の「カノン」となりつつある葉石濤著『台湾文学史綱』（1987年）においては、「五〇年代は、女流作家が輩出した時代である」と位置づけられ、またそれらの女性作家の作品を、反共をテーマとしているけれども、「社会的観点の希薄な、家庭、男女関係、倫理等を主題とした」[1]作品であると記述するのみにとどまっている。一方、最近では、女性文学について研究を進めてきた、范銘如（国立政治大学台湾文学研究所教授）、梅家玲（国立台湾大学台湾文学研究所教授）らが定説となりつつある＜五〇年代文学＝反共・懐郷文学＞への対抗的な読みによって、女性作家がジェンダー的立脚点から国家と郷土想像を再構築し、女性の主体意識を形成していることを明らかにした。また邱貴芬（国立中興大学台湾文学研究所教授）も従来の文学史エクリチュールに隠された主流イデオロギーの影響を指摘するなど、五〇年代台湾の文学場に新たな視点、新たな評価を与えようとしている。著者もそれらの論述を踏まえ、本論文において、一九五三年に台湾新竹市で海洋出版社より出版された、張漱菡主編の女性小説選集『海燕集』をテクストとし、「モダンガール」表象からあぶりだされる、ジェンダーと国家ディスコースが複雑に絡まり合うコンテクストにおける女性の主体というテーマに取り組んでいる。

本論文は三章からなり、「一、序」、「二、現代女性の視覚の出現と商品生産との共謀」、「三、一九五〇年代のモダンガールのジェンダー意識とディスコースの領域」として構成されている。本論文において最も注目すべき点は、著者が、『海燕集』が編集長張漱菡によって、作品ごとに女性作家のポートレートとキャプションが添付されたことに注目して女性作家の「現身策略（露出戦略）」と命名し、女性作家が読者による凝視の対象となったことを指摘したこと、さらには商業セールスという点でも成功したこと、つまり読者との「共謀」によって文学の商品化がなされたことを明らかにしたところにある。そして『海燕集』に収録されたのは当時の台湾文学場において主流であった反共文学、また「革命＋愛情」をテーマとしたロマンス小説が大部分を占めているとし、それぞれの作品に詳細な分析を加えている。同時に、女性作家による「モダンガール」表象は、男性の欲望の対象となりつつも、新しい女性の「放縦さ」に対する恐れをも引き起こす。しかしながら、最初は恐れでもあった「モダンガール」が結局は体制主導の文化ディスコースに合わせた「良妻賢母」として描かれるというように、女性作家たちが複雑な「パフォーマンス戦略」を繰り広げたこともまた提示されている。

本稿では、紙幅の関係により、著者の同意を得た上で、第四章のまとめ（結語）は省略することとなったため、一部をこちらで紹介しておく。著者は最後に、「『モダンガール』というトピックに十分な

弁証性があるとするならば、これらの中産階級の西洋化された生活スタイルを送るモダンガールのイメージは、娯楽と商業のほかに、依然として伝統的な規範を延長し、家庭の倫理秩序を追い求めるなど、女性作家たちが多元的な側面を露わにし、常に国家ディスコースとジェンダーディスコースの合流／分岐の間で不安定に揺れ、複雑なパフォーマンス策略を展開するのである。これらの女性小説が標榜する中産文学の味わいとモダンガールの特徴は、当時の文学場構造に対してどのような衝撃を生み出したのか、また重なり合うことでどのような矛盾する緊張感が生じたのか。それと反共／戦闘文芸はどのように連動し、反共文学の審美形式の転換に影響し、通俗叙事形式へと転向したのか。これらの文学ジャンルと、ジェンダー・ポリティクスと台湾文学場の間に関わる課題は、更に研究を深める価値があり、新たに五〇年代女性文学の複雑な境遇と多次元の構築が待たれている」と、台湾の五〇年代女性文学における「モダンガール」研究の重要性について力強く述べている。

（にしばた・あや／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻博士後期課程）

注

1　葉石濤『台湾文学史綱』（春暉出版社、1987年）96頁。引用箇所は中島利郎、澤井律之訳『台湾文学史』（研文出版、2000年）102頁を参照。